

北京オリンピック開会式と「イメージング・チャイナ」

The opening ceremony of Beijing Olympic Games and the impression of China

周 星

ZHOU Xing

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: zhouxing@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

Beijing Olympic Games in 2008 has two important significances both for modern history of China and for the history of Olympic Games. As for China, holding Olympic Games means its further open policies to the world and further development willing on one hand, on the other hand, to create an harmonious atmosphere for its peaceful rise through stimulating its national spirits, shaping its sports great country image. However, various and complex disputes about the Olympic Games in Beijing have happened all over the world and led to some sharp conflicts. This paper attempts to inquire into the following aspects, one thing is the information which Chinese government wished to send to the world by the opening ceremony, another thing is the 'self image' which China wanted to shape through the opening ceremony of Olympic Games and the reflection from outside world, including the different acceptance, misunderstandings and refuses, and the third thing is to bring to light the conflicts and dialogues around the Chinese state image as well as the concealed significances and possibilities.

Key words: Beijing Olympic Games, the opening ceremony, the ritual politics symbolism, the state image

はじめに

2008年の北京オリンピックは、中国現代史上そしてオリンピック史上、二重の意味で重要だった。当然のことながら、13億人以上もの人口を抱える中国がオリンピックを開催したことは、世界オリンピックにとって画期的な意義を持っていた。また中国にとっても、オリンピック開催には高度経済成長を背景に中国の更なる発展を推し進めようという狙いがあり、同時に国民意識を向上し、スポーツ大国としてのイメージを作り、更には平和のため調和のとれた雰囲気と条件を生み出そうという目的があった。だが一方で、このオリンピックを巡り、世界中で巻き起こった様々な複雑な論争も、また非常に目を引くものであった。

本論文は、中国政府がオリンピック開会式を通じて世界に伝えようとした情報、つまりオリンピック開会式を通じて構築しようとした中国の「イメージ」及びこの「イメージ」に対する外部社会の反応を分析する。外部社会の反応には程度の異なる受容・無理解・拒絶などが含まれるが、これらの分析を通じて、中国の国家イメージを巡って繰り広げられる衝突と対話には、一体どのような重要性と可能性があるのかを探りたい¹⁾。

一、現代中国における「儀式的政治」

「国典」としてのオリンピック開会式を理解するためには、まず現代中国社会における「儀式的政治」の重要性について知っておかなければならない。ここで述べる「儀式的政治」とは、ある特定社会または政治体系の運営において、儀式及びそれに関連する象徴性が鍵となる作用を及ぼすことを指す。これらの儀式を通じて、その社会政治生活の内部論理を部分的に垣間見ることができるのである。現代の国際社会ではほとんどの国家や政治共同体が、程度こそ異なれ各自の国家シンボルを規定し、各種国家法典を行っている（例えば建国記念日、国父記念日、国慶節など）。だが現代中国において、儀式的政治が持つ意義と性質は、より特殊なものである。

中国には古くから「国の大事は政と戦にあり」²⁾という言葉がある。ここでの「政（ま

1) 本論文は愛知大学助成による共同研究プロジェクト「〈中国〉をめぐるオリエンタリズム後の知の視覚化とイメージング研究」(2008-2010、責任者：鈴木規夫教授)の研究成果の一つである。2009年12月、愛知大学 ICCS と北海道大学東アジアメディア研究センター共催による国際シンポジウム「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」が名古屋で開催された。当該シンポジウムにおいて、筆者は「北京オリンピック開会式と『イメージング・チャイナ』」と題して発表を行い、馬場毅、渡辺浩平両教授からご教授頂いた。ここに深く感謝申し上げる。

2) 『左伝・成公十三年』。

つりごと)」は様々な儀式や祭典を指し、極めて多種にわたり中国伝統的政治文化の中に存在している。例えば帝王による封禪や天地日月の祭事、先祖供養；皇帝による親耕礼；皇后の親蚕礼；大臣たちの朝拝礼；諸侯の冊封礼；外部貴賓による覬見礼などがそうである。これらの儀式や祭典を通じて、君主の権力には天（神）から授かったものという神聖性が付与されることになる。つまり天下の最高権力者である「天子」は天・地・太陽・月と共に輝き、先祖代々の庇護を受け、万民のため農期に合わせた国家規範を定め、家臣との間に上下の秩序を確立し、諸侯との間に「中心－周辺」から成る臣服朝貢関係を確認し合う。これによって天下安泰、統治永続が可能となるわけである。古代中国は自らを「礼儀の邦」と称し、そこでは儒家学説——特に儀式と祭典が天下の秩序に対して持つ重要性を強調する学説——が支配的な地位を保っていた。古代中国文明体系において、儀式と祭典は象徴的に天下秩序を構築する基本システムだったと言って良いだろう。中国には一貫して「礼儀治国」の伝統があり、儀式と祭典を重んじることは、朝廷が人々を教化し、また人々が安定感を得るための主要な手段だったのである。

1911年の辛亥革命以降、時代は中華民国、中華人民共和国へと移ってゆく。いずれの時代においても、国民国家または多民族国家としての中国は、古代中国の天下帝国体制とは本質的に異なっていた。だが儀式と祭典を通じて国家イデオロギーを表出し、国民の団結を促し、国家秩序を確立しようとする点においては、古代との継承関係が伺える。例えば国家行事と祝日の制定、国父・共和国創設者・建国元勳・烈士など国家的英雄の祭祀や記念、国家リーダーによる重要な祭事空間（例えば天安門城楼と広場）での各種国家儀式（閱兵式・国旗掲揚式など）の開催や式における既定作用の発揮など、これらは儀式や祭典が国家政治生活の中で神聖性を生成するために用いられる大切な方法であり、同時にそれが意義を持った運営システムであることを示している。また、近年立て続けに開催された国家儀式・祭典には、香港返還（1997年）、マカオ返還（1999年）、オリンピック開会式（2008年）、建国60周年大慶（2009年）などがある。中国は好んで大規模の国家儀式を執り行い、またそれを得意とする。国民も儀式が伝える国家や国家イメージに関する様々な情報を受け入れやすい傾向にある。各レベル・各部署の中国人リーダーたちは各種儀式に出席するために多大な労力を費やし、「テープカット」や送迎などに精を出すだけでなく、式における自分の立ち位置や席順が妥当かどうか、儀式の中心的象徴物との距離が近いかどうかを非常に気にする。言い換えると、儀式は権力の実践及び権力テクニクの演出として、中国社会とその政治生活において、依然として秩序を確立し、権威を生成するための主要手段の一つなのである。

文化人類学の視点から見ると、儀式及びそれが意味する象徴性は、人類の本質的な行為の方式であり、思考の特徴である。儀式にはコード表象が頻繁かつ繰り返し出現する。それらは現代国家の複雑な政治生活において何ら目新しいものではないし、各々の政治文化

伝統の影響を強く受けている。古典的な人類学が指摘したように、現代中国の儀式的政治には集団感情と社会統合を強める作用があり、国家内部や特定のイデオロギー共同体内部において共鳴を生み出し、交流を促し、そして秩序を強化する。また現代人類学が提示するように、規定システムの儀式パフォーマンス及びそれに生成される象徴性を通じて、儀式はポジティブな文化想像力をも手に入れる。儀式が表出する象徴的世界はしばしば現実の生活世界と混じり合い、交錯することで、人々に特定の世界観・イデオロギー・精神状態などを形成させるかもしれないのである。儀式は一種の神聖化されたプログラム行為として、特定の時空内で象徴的境界線を創出し、社会の動員を促し、コミュニティのアイデンティティを強めることができる。それ以外にも、まるで宗教のような強い情緒的感染力を有し、政治の現実に対する大衆の認識に影響を及ぼすことができる。儀式が象徴コードの力を用いて神話やイデオロギーを構築し、それによって政治権力を強めてゆく際、儀式と権力は相互依存のあるいは因果的な関係にあると言える。多くの場合、儀式は特定のコンテキスト・背景・時空の下で執り行われ、特定の政治目標を達成する。特に、政治権力が強制的な姿で示されるのではなく、象徴的・隠喩的・その他婉曲な方法によってその合法性や権威性を伝達・表現・補強する必要がある場合、儀式が象徴性を通じて生成・提示する権威は、より自然に公衆に受け入れられることが多い。

アメリカ人類学者ギアーツは、バリ社会の伝統的な政治体系を議論した際、その特徴は儀式・祭典が政治統治関係にオープンな演劇的表現を与えることにあったとした。シンボルや儀礼、国家の演劇的形式などで満ちた所謂「劇場国家」において、多くの盛大な儀礼にはしばしば多大な人力と社会的財が費やされ、これらの儀礼を行うこと自体が国家目標となる。宮廷儀礼が宮廷政治のエネルギースystemになるのと同様に、儀礼自体が国家の基本形態となるのである。中国人類学者郭於華は、国家権力に浸りきっている中国人社会を論じた際に、「儀式国家」という概念を用いて、現代中国では儀式こそが権力のテクニックと実践の基本方式であり、生活を政治化する一つ的手段だと指摘した。現代中国史上における各種政治運動の現実に基づき、彼女は次のように「国家儀式」を定義する。「国家儀式」とは、最高統治者によって発動され、民衆が強制的にあるいは自ら望んで参加する政治運動であると（郭於華、2000: 338-383）。これに対して筆者は、儀式政治というのは現代中国政治生活において国家の正統権力が古代政治文化伝統または本土資源に対して行う継承と活用であり、全人類に普遍的に共通する政治権力シンボルの構築方法だと考えている。

上述のような文化人類学儀礼理論の視点から北京オリンピックの開会式を分析すれば、オリンピック招致から開会式開催に至るまで、これが大量の儀式的パフォーマンスと一連の象徴的活動から成る「運動」だったということを理解するのは難しくない。オリンピック開会式という国家祭典を巡って、中国政府は「非常」状態の社会動員と権力行使を行う

ことで成功を収めた。政治権力システムが、巨大祭典の組織・運営・展開を支えたのである。だがもう一方では、この巨大祭典もまた更に大きな国家的政治目標の実現へ向けて利用された。このため、特定の時期において、オリンピック開会式は中国最大の政治となった。国家は祭典の発動者・主催者として、ほとんど全ての資源を使用した。もしも儀式・祭典が既定国家あるいはコミュニティのイデオロギー形態や生存状態の集合的表現であるならば、中国で開催されたオリンピックとその開会式の持つ意味は明らかである。オリンピック開会式を通じて、国家と民族は象徴的に演出された。この大型祭典または一連の儀式の集合的パフォーマンスを通じて、中国はセルフイメージを提示し、そして世界を想像したのである。

一連の儀礼から成る大型祭典として、北京オリンピック開会式はオリンピックという特殊な状況下で、既定の慣例的儀式行為を完成させなければならなかった。それと並行して、主催国の自己PRを主旨とする儀式行為を浸透させ、明示する必要もあった。だがここでは、北京オリンピック開会式の規模の巨大さを理解するためにも、まず古代中国文明が持つ別の政治文化伝統にも触れておいた方が良いだろう。それは「大一統」という天下観の影響下で育まれた「好大喜功」の政治文化である。古代中国は自らを天下の中央に置いており、朝廷や統治者主導の儀式・祭典も非常に規模が大きく、豪奢を極めたものだった。帝王に遠大な計画があれば、天下のあらゆる資源を投じることができた。そのため歴史上比較的影響力のある王朝は、万里の長城・シルクロード・大運河・紫禁城・万園の園（円明園）などのような、世を揺るがす大工程に着手した。現代になるとその国土・人口の規模や平和的時勢などの理由から、歴代中国政府は時に政治的圧力を受け、また時に政治的衝動にかられ、結果いくつかの「重大プロジェクト（大事）」を実施することになった。そうして着手されたのが、三線建設・三北防護林・三峡大ダム・青海―チベット鉄道・南水北調・高速道路と高速鉄道ネットワークなどである。中国政府の議事日程において、オリンピックは単に多くの「大事」の一つに過ぎず、実際閉幕直後には上海世界万博と広州アジアオリンピックが控えていた。オリンピック開催と運営で成功を収めるために尽力し、完全・完璧を可能な限り追求する、これは「好大喜功」という中国政治文化論理に非常にしっくりくるものだったのである。

二、「象徴性」の衝突

オリンピックは4年に一度の熱狂的な盛典であり、また「地球村」を背景とした「ゲーム」である。よってオリンピックとその関連儀式は、異なる種族・国家・言語コミュニティに対してコミュニケーションの場を提供しなければならない。オリンピック運動はもともと古代「儀式」と「演劇」の伝統を受け継いでおり、現代世界においては競技の儀式

化と儀式のグローバル化が顕著な傾向となっている（彭兆栄、2003）。1894年に始まった現代オリンピック運動は、紆余曲折の歴史を経て、今では各種族・各大陸・各国国民を団結することができる世界有数の普遍的理念・実践にまで発展している。この運動はグローバル化の長い歴史が生み出した産物であり、また地球一体化の成長を更に推し進めるエネルギーでもあると言えるだろう。国家と民族集団は、しばしば戦争のように極端な政治形態を通じて競い合ってきた。これに対してオリンピック運動が發明・開拓したのは、互いの緊張を緩和し、公平に競技するもう一つの異なるシステムだった。ちなみにこれとよく似たシステムには、「奥深いゲーム」としてのサッカーワールドカップなどがある（Christian Bromberger, 2008: 92-109）。「大家族」の国際社会を象徴するシンボルとしては、連合国を除いて、オリンピックがある意味最も重要なものの一つだと言えよう。よって、中国は2008年のオリンピック招致と運営の成功を、全面的に国際社会に溶け込み、全人類に貢献すると同時に中華民族の偉大な台頭を表出する、という極めて象徴性に満ちた「大事」と見なしていた。

だが実際は、北京オリンピックにとって困った話題も多数持ち上がってきた。その一つがスポーツと政治の関係である。発足当初から今に至るまで、オリンピック運動はスポーツと政治の関係を断絶することに力を注いできた。スポーツによってイデオロギーを超えた全人類共有の理念と夢を築こうというのだが、モスクワオリンピック（1980年）とロサンゼルスオリンピック（1984年）では苦汁を舐める結果となった。本来スポーツというのは、外部社会に目を向け始めた中国が、イデオロギーや社会制度の差異を超えて、世界と対話できる数少ない領域であり、また「言語」の一つだった。その最大の業績は、間違いなく1971年の「ピンポン外交」だろう。国際スポーツ大会の功績（メダル）はナショナリズム高揚の根拠にされ、活躍した選手たちは国家の英雄にまで祭り上げられた。これは現在世界各国でも当たり前にもみられる操作だが、中国もまた例外ではないのである。特に中国では、スポーツは国家が運営する事業となっており、これにより一世紀以上もの間「東亜病夫」と揶揄された屈辱を晴らし、国家の富強や国民の健康そして中華台頭を目指そうという願いが込められていた。中国は発展途上国として、また人口大国・スポーツ大国として、オリンピックの普遍的・基本的・倫理的諸原則に基づいてオリンピック招致に立候補する資格があると考えた。しかも中国にとって、オリンピックは百年もの長きに渡り抱え続けた「コンプレックス」ですらあったのである³⁾。現代オリンピック運動が巻き起こった時、中国の国力はまさに衰弱し、列強国の侵略や圧迫を受けていた。1932年第

3) 1908年ロンドンオリンピックの刺激を受け、天津の某雑誌に一本の原稿が掲載された。それは、中国は一体いつになればオリンピックを開催できるようになるのか、という感慨が込められたものだった。このことから、2008年に北京オリンピックが開催されるまで、中国のオリンピックに対する追求は国内メディアから「百年夢想（百年越しの夢）」と呼ばれた。



写真1 1971年の「中米卓球外交」35周年記念のため、中国を訪問するアメリカ卓球代表団（2006年3月29日、王毓国 撮影）

10回ロサンゼルスオリンピックに、中国は初めて計6名の代表団を派遣したが、そのうち選手は1名のみである。また1952年第15回ヘルシンキオリンピックにおいては、「紅色中国」の参加の是非が問われ、対立・分裂が起きた。その後も台湾問題を巡って、中国は1958年8月にIOC（国際オリンピック委員会）を脱退し、1979年11月になってようやくIOCへ復帰、「中華台北五輪委員会」を承諾した。その後、1990年に鄧小平がオリンピック開催について意味深い発言をしたのは、中国が1989年6月の「天安門事件」によって多くの困難に直面しているさなかの出来事だった。1992年から1993年にかけて、中国は2000年第27回オリンピック開催地に立候補したが、落選している。落選の原因の一つとして、「天安門事件」によって中国の国家イメージが災難的な大ダメージを蒙ったことが挙げられた⁴⁾。以上からも分かるように、中国は投資を惜しまず、オリンピック開催実現へ向けて全力で取り組んできた。オリンピックという儀式を通じて、百年にわたる痛みと挫折の歴史を清算すること、「弱国心理」を治癒すること（曾慶香、2008）、また影響力ある大国としての地位を国際社会から象徴的に承認されることを期待したのである。

一方、欧米諸国のメディアも中国と同じように「平常心」を欠いていた。中国が2度目に招致した際、その申請期間（1998年11月25日～2001年7月13日）に刊行された米国『ニューヨークタイムス』と英国『タイムズ』を例に挙げよう。どちらの新聞においても、このスポーツ史上の事件は政治事件として報道される傾向があり、ほとんどの記事が人権問題と結び付けられ、中国のオリンピック招致は強く政治化・イデオロギー化されてい

4) 1993年6月10日、米国下院外交委員会は口頭決議を通じて、北京或いは中国の如何なる地域において、2000年オリンピックを開催することに反対すると表明した。1993年9月24日、IOC第101回会議において、89名の委員による匿名投票が行われたが、中国は2票差で敗れ、開催地にはシドニーが選ばれた。だが後日、オーストラリアは2名のIOC委員に賄賂を贈っていたと報道された。

た。欧米メディアは賛成・反対に関わらず、事前に準備された人権問題という語りの枠組みの中で報道した。つまり、賛成者は北京でオリンピックを開催することは中国の開放と人権改善を推し進めるだろうと考え、反対者は人権記録の芳しくない北京は招致の資格すらないと考えた。欧米メディアはオリンピックの普遍性原則や中国の招致に関する具体的な情報と関連背景をぼかし、無視し、人権問題のみを取り上げて誇張したのである。こうしたイデオロギーが招いた偏見は、ある種の「ディスコース」からは特に歓迎され、受け入れられていった（孫有中、2009: 41-83）。メディアの人権審議を通じて、中国はあたかも邪悪な帝国であるかのようなイメージを植え付けられ、これにより欧米世界の「正義」に固執する人々の社会心理を満足させることとなった。二元対立を想定した世界において、中国のイメージは欧米の「他者」または「異種」であり、あらゆるものが欧米と逆であるとされる（周寧、2006: 706-711）。そうした視点から見たオリンピック開催権というものは、まるで欧米主導の国際社会が中国に与えた一種の「施し」であり、中国を監督・修正・改造する操作レバーだった。

2001年、北京が2008年第29回オリンピック開催地に選出された。だが時期をほとんど同じくして、中国は果たしてオリンピックを主催する「資格」があるのかといった疑問の声も、欧米や日本のメディアを連日賑わせていた。疑問の大半は中国国内のチベット・ウイグル問題や民主・人権・言論の自由問題、環境問題、貧富の格差などの社会問題と関連しており、欧米の一部の人々と多くのメディアが中国という社会主義国家に対して抱く根深い「不信感」を反映していた。中国の経済が30年以上連続で高度成長を続け、また社会が徐々に開放へ向かっている状況においても尚、欧米メディアと一部の人々の中国を見る目は、日に日に厳しさを増していった。

もちろん中国国内にも、これほどの貧富格差や社会問題に直面している現状で、巨額資金を費やしてオリンピックを開催するべきではない、と反対あるいは批判的な意見を述べる者も少数ではあるが存在していた。しかし国民の大多数は、政府のこの行動と決定を支持していた。2001年のオリンピック招致期間中、中国10都市で行われた戸別調査によると、中国の大衆がオリンピック開催を支持した理由には以下のようなものがある。「台頭した中国の姿を世界に披露し、国の榮譽を勝ち取るため」(12.3%)、「中国の国家地位向上のため」(8.9%)、「経済の発展を促進するため」(8.6%)、「悠久なる中華文明を広く知らしめ、世界に中国を理解してもらうため」(6.3%)。また、中国メディアと海外メディアは同様に北京オリンピックを注目していながら、その視点は明らかに異なっていた。国内メディアは中国人がオリンピックを支持する情景を全力で報道し、海外メディアは中国政府がオリンピック招致の際に掲げた公約を守るかどうかを注視し、世論監督の意味合いが非常に強かった。オリンピック関連の工事が建造物の撤去や住民の立ち退き、作業員の待遇などの問題に抵触すれば、市民生活とその利益にどのような影響があるのか、また中

国政府が国内外メディアに対してどこまで報道を容認するかなど、こうした問題を欧米及び日本のメディアは喜び勇んで報道した。2007年7月に米国NBC (National Broadcasting Company) と米紙『ウォールストリート』が共同で行った調査によれば、北京オリンピック開催に関連してどのような措置が取られることが最も重要かという質問に対し、人権改善と答えたアメリカ人は73%、環境保護策と答えた者は57%、「公平な」貿易推進と答えた者は53%に上ったという (李慎明、2009: 84)。

2008年3月14日ラサで起きた暴動事件は、欧米メディアを更に加熱させる結果になった。2008年3月から同年4月にかけて、米民間調査機関PRC (Pew Research Center) が世界24カ国の2.4万人を対象に調査を行った。そのうちフランス・ドイツ・イギリスの3カ国において、中国を開催地に選んだのは誤りであり、中国へのマイナスイメージが大幅に強まったと答えた調査対象者は、それぞれ55%、47%、38%に上った (李慎明、2009: 154-156)。ダライ・ラマに同情する欧米・日本の一部国民は、世界聖火リレー計画が多くの困難に直面するのに乗じて、リレーを妨害・阻止した。また海外メディアもこれを風刺的に報道し、中国の傷をえぐるうと躍起になった。更に一部の極端な人々は、北京オリンピックをナチスドイツが開催した1936年のベルリンオリンピックの再来とまで揶揄した。中国の世界聖火リレー計画は確かに「好大喜功」の嫌いがあり⁵⁾、その記録と価値は抗議の声の中にかき消されてしまった。だが一方で、外国人による聖火リレーの妨害は海外に住む華人・留学生・華僑を空前の規模で刺激し、その結果激しい聖火防衛戦が繰り広げられることとなった。オリンピックの聖火リレーを巡る衝突は、ダライ・ラマ一人が巨大な影響力を発揮したからというよりは⁶⁾、むしろ中国がオリンピックを通じて良いセルフイメージを構築・伝達しようと試み、それが欧米・日本のメディアと一部の人々にとって受け入れがたかったために生じた、といった方が良いだろう。衝突は地球規模で広がり、それに伴う形で海外の華人・留学生・華僑の「聖火防衛」運動も広がっていった。長野の「聖火防衛」運動を事例にした研究では、この運動により在日中国人のナショナリズムと国家アイデンティティが強められたとしている (潘子剛、2009a: 163-180)。またインターネット掲示板も、聖火リレーに反対し、チベット独立を支持する各国の反中派・嫌

5) この計画は、オリンピック史上最長時間・最長距離・最大面積・最大人数で行われた聖火リレーとして記録を打ち立てた。2008年4月1日に始まった国外リレーは29日間に及び、世界5大州、19カ国の19都市、そして香港と台湾を駆け巡った。その総移動距離は97,000キロ、参加リレー選手は2,000名以上、開催された関連儀式は42回を数えた。聖火が中国国内に届けられた後は、97日をかけて31省の113都市・地区を回り、移動距離とリレー選手者数はそれぞれ40,000キロと19,000名を超えた。2008年5月8日には、世界最高峰のチョモランマにまで登っている。詳しくは (金汕、2009: 37) を参照のこと。

6) ダライ集団は聖火リレーを利用して「藏独 (チベット独立派)」の国際化に最大限の力を注いだ。だが「狂喜」が収まると、中国政府との話し合いは更に困難を深める結果となってしまった。



写真2 日本の長野で、聖火リレーをめぐる対立（2008年4月28日、東方網より）

中派によって利用されたが、一方では海外華人が防衛運動を組織する際に重宝がられた。

欧米社会の一部の人々が聖火リレーに抵抗を感じたのには、複合的な原因が考えられる。中国政治体制への反感、中国経済の高度成長に対する嫉妬、中国の軍事力強化への恐れ、そしてもちろん長年培ってきた優越感と未だ残り続ける冷戦イデオロギーに基づいた敵視もあっただろう。また日本の長野で生じた「聖火攻防」の場合は、2007年から2008年にかけて起きた「毒餃子」事件と深く関係していた。この事件は日本人の「嫌中」感情を引き起こし、日本社会に根深い「常識」——中国を蔑視・差別・軽視するという「常識」——を一層強める結果となった（潘子剛、2009b: 157-170）。メディアは異常とも思われる報道（テロップ・重複・無関係の疑似症状も全て事件と関連付けるなど）を通じて、中国の所謂「現実」と固定化イメージを創り上げていった。そして2006年に日本外務省が行った調査によれば、実に90%以上の日本国民がメディアを通じて中国を理解しているのだという。

文化人類学の視点から見れば、北京オリンピックとその関連儀式（聖火リレー・開会式等）に関する論争は、実は「象徴性」を巡る抗争だったということができる。一方で、中国は「象徴」的に平和の芽生えと中国の新しいイメージを示す必要があった。だがもう一方では、この種の象徴的表層や自らが示したものを拒絶・破壊し、異なる象徴性をもってそれに抗い、対峙したのである。上述の通り、中国政治文化は「儀式」と「好大喜功」とを重視する傾向があり、中央集権体制はしばしば徹底的に社会全体を動員して「大事」を行わねばならなかった。そしてそのような中国にとって、オリンピックはまさに千載一遇の好機となった。結果的に、欧米主導のオリンピックシステムは中国の招致そのものを完全に握りつぶすことはできなかった。また、聖火リレーの妨害や開催国への誹謗中傷のような北京オリンピックの象徴性を巡って生じた衝突も、北京が獲得した開催権を取り消す

ことはできなかった。こうした意味において、これらの衝突自体もまた象徴的なものだったと言えよう。もちろん象徴的な衝突は全く無意味なのではない。なぜなら衝突する双方共にクリアな情報を発信することができたからである。

三、開会式の象徴的アレゴリーとその解釈

開会式がオリンピックという世界的盛典において持つ重要性 (J. A. Mangan, 2008: 75) から、開会式の成功はオリンピック全体の成功の「半分」を占めるとまで言われることがある。北京オリンピック開会式は典型的な「グローバル・メディア・イベント」であり、着工当初から世界の目を引く巨大プロジェクトになることはほぼ決まっていた (胡曉明、2011: 128-129)。14,000名以上がパフォーマンスを行う開会式の施工・組織体制・運営などは言うに及ばず、更には各種音声・電飾・レーザーグラフィックなどの高度科学技術を可能な限り駆使し、プロデューサーの設計した背景や画面を実現させようと試みた。この開会式は大規模なコードプロジェクトであり、主催国が重要と考える情報を世界に発信し続けることとなった。

正式に披露された開会式は、パフォーマンスショー・選手入場・聖火点灯など複数のパートから成っていた。このうちパフォーマンスショーには、カウントダウンや国旗掲揚など儀式が多数含まれていた。9万人以上の観客と40億人以上の視聴者が見守る開会式には、80を超える国と地域から104名の首脳や王室も出席しており、事実上中国史上最大の盛典となった。

開会式の様々なパフォーマンスと儀式は、ほとんどあらゆる細部に象徴的意味が込められていた。そのため、驚くほど沢山の中国文化要素やコードが使われた。これらの儀式コードは意味を濃縮させ、簡単明瞭な認知と感情の領域において密接に関連し合っていた (Victor Turner, 2007: 50)。吉兆を意味する数字を例に挙げよう。2008年8月8日午後8時、メインスタジアム・中国国家体育場 (通称「鳥の巣」) で開会式が始まったが、これは中国夜間テレビ視聴率のゴールデンタイムであると同時に、中国人が縁起の良さを感じやすい時間でもあった⁷⁾。この他にも、2008名の奏者が「ほとぎ (缶)」を演奏し、「朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや」を吟じた。メインスタジアムの上空には花火で2008個の笑顔が描かれた。また2008名のパフォーマーが太極拳を演舞した。これらはすべて「2008年」のアレゴリーである。そして次に、中国四大発明の一つでもある花火が大量に

7) この日は中国旧暦の立秋吉日である。また2008年8月8日午後8時というように連続して8が4回並ぶことで、記憶しやすいように、中国語の発音上「8」は「発」と似ていることから「発達」・「発財 (裕福になるの意)」・「発展」などのアレゴリーが生じる。

放たれ、29の巨大な足跡が描かれた。花火の足跡は北京市の中央線（風水によると古代北京城の生命線）に沿ってメインスタジアムへと歩み寄ってくるが、これは百年の時を経て第29回オリンピックがようやく北京に到着したことを象徴している。これ以外にも8名の旗手が中国国旗を掲げ、その国旗を民族衣装姿の児童56名が囲み、56の民族から成るパフォーマーが国歌を斉唱するなど、縁起が良いとされるこれらの数字が持つ意義は一目瞭然だろう。

またパフォーマンスショーの中には、次のような中国要素も登場した。「日時計」から「ほとぎ」へ反射された光でカウントダウンの数字を演出；ワイヤーワークで浮遊するスタントマンによって、中国のロマン溢れる「飛天」——これは世界文化遺産の一つ敦煌壁画に見られる——が五輪マークを空へ抬い上げる姿を表現；林妙可による中国の愛唱歌「歌唱祖国」の独唱；竹筒を手にした孔子の「三千弟子」による「四海の内皆兄弟なり」の吟唱；剛柔相濟と天人合一の精神に基づく太極拳の演武；字体の異なる「和」という活版印刷文字を人間によって表現。これらは全て中国文化の精髓を表現しており、同時に中国が平和を愛し、「和」を重んじる社会・「和」を重んじる世界・平和的台頭などを目指すという趣旨と呼応している。そして巨大な「中国絵巻」を舞台にして、開会式は「四大発明」・「文房四宝」・「万里の長城」・「シルクロード」・「鄭和大航海（鄭和下西洋）」などに纏わる物語を次々と語ってゆく。史書でもある絵巻は中国5千年の歴史文化の進展を語り、極めて多くの中国のコード・シンボル・風情などを動的に表現した。例えば国画（山水画）・漢字・書法・戯曲（昆曲⁸⁾・京劇・人形劇）・衣裳・舞踏・音楽（古箏）・遊芸（凧）・儀礼・建築（龍鳳柱）などがそれぞれである。この他にも、「祥雲」を外観モチーフにした聖火トーチやシンボルマーク「中国の印章・舞い踊る北京」（通称「中国印」）及び魚・パンダ・聖火・チベットカモシカ・燕を代表する大会マスコット（通称「福娃」）などがある。このうち5人の「福娃」は「五行」（金木水火土）・「五徳」（仁義礼智信）・「五方」（東西南北中）そしてオリンピック五輪などのアレゴリーと関連付けることができる。また「福娃」の名前「贝贝（Bei bei）」・「晶晶（Jing jing）」・「歡歡（Huan huan）」・「迎迎（Ying ying）」・「妮妮（Ni ni）」の頭文字を繋げると、「北京欢迎你（bei jing huan ying ni）」となる（馮惠玲、2010: 2-23）。つまり、開会式は古代中国文明を全力で演出、表示した。ある者はここから祖先に関する記憶を読み取り、祖先につながるアイデンティティの象徴的な表現だとまで述べている（毛冷蕊、2009）。「燦爛文明」というテーマが終わった後は、「輝煌時代」と題されたパフォーマンスが続いた。絵巻には都市の高層ビル群・立体交差橋・青海ーチベット鉄道・子供たちの笑顔・煌めく星空・宇宙遊泳をする宇宙飛行士

8) 昆曲はすでにユネスコによって「世界無形文化遺産」（人類の口承および無形遺産の傑作）のリストに登録されている。

福娃 Fuwa



写真3 北京オリンピックのキャラクター：「福娃」

など、現代中国の様々な情景が映し出されていった。これは改革開放によってもたらされた中国の変化とその成果を反映するもので、中国の成長活力と国民の精神面を分かりやすい映像で世界に提示した。そして最後に、中国スポーツ界の国民的英雄でもある李寧が登場し、「夸父追日」をモチーフにした形で聖火台に火を灯した。

以前、オリンピックを一種の「祭儀圏」に例えた研究者がいる。これはオリンピックが参加者全てに共鳴を与え、人々が共に享受する信仰空間を生み出すためである。そうであるからこそ、開会式は世界に「私たちは何者か」を示す必要があり、「私たちとあなたたちは一つの家族」というテーマを表現しなければならないのだという（王天祥・李琦、2009）。また、開会式では演出によって中国文化を解釈する以外にも、オリンピック精神と北京オリンピック自身のテーマを表現し、伝達する必要があった。この目的で設計された演出には以下のようなものがある：ギリシャのオリンピアでの採火；地上から空中へと掲げられた五輪マーク；音響・照明効果とパフォーマーによって形作られた平和の鳩；メインスタジアムに浮かび上がる地球と地球の上でパフォーマーが演じる各種競技；サラ・ブライトマンと劉歆という英中両国の歌手によって歌い上げられた主題歌『You and Me』など。もちろんこの他にも、オリンピックの一般的儀式がある。選手入場式⁹⁾・主催国首脳とIOC会長の挨拶・選手審判宣誓・五輪旗掲揚式・放鳩式（選手と観客の手振りに合わせて平和を象徴する鳩を一斉に飛ばす）・聖火点灯式などがそうである。これらの儀式は、全て一つの目的の下に行われた。つまり「One World, One Dream」という大会スロー

9) 開会式における代表団入場の順序も、極めて中国色豊かな手法がとられた。204の代表団はまず国名を簡体中国語に訳され、画数順によって並べられた。画数が同じ場合は一文字目の筆順に従い、もし一文字目の筆順も同じなら、二文字目の筆順で最終的な順番が決められた。同じ画数の簡体字は、横（横）・縦（縦）・払い（撇）・点（点）・折り（折）の書き順で並べることができる。これまで主催国が参加国の入場順序を決める際、その国の公用語の発音やアルファベットを用いることが多かったが、中国のとった手法はこれとまるで異なるものだった。

ガンを温め、表象することであり、また人類が享受するオリンピックの平和的理想及び人類の速さ・高さ・強さの限界に挑むスポーツ精神を表出することである。これらは明らかに「世界は我々が参与する舞台」(Jonathan Friedman, 2004: 295) というグローバル意識の表象であるが、この時重要だったのは、このようなグローバル意識が中国人主導で表出されたということなのだった。

上述のもの以外にも、中国と欧米・オリンピック要素と中国要素が融合したデザインや方式によって、多くのアレゴリーが表現された。例を挙げよう：メダルにデザインされた「金鑲玉」；国も種族も異なる「地球村」の子供たちの笑顔がプリントされた1000本以上の傘；西洋人によって設計され、前衛的でありながら「中国伝統哲学」の思想を反映した「鳥の巣」(邱華樺, 2010: 7-11) など。一方、開会式の総合プロデューサー張藝謀自らが最も重要だと考えていたのは、「共に歩む」というアイデアだったという。これはまずダンサーたちが腕全体を筆にして中国絵巻上に水墨画を描き、次に無邪気な子供たちが児童画を描き、最後に入場してきた世界各地の選手・コーチ・審判員が様々な足跡で絵巻を完成させるというもので、「One World, One Dream」の理念を最もよく表現していた。またこれは二度と同じものが作れないことから、空前の規模で行われた「パフォーマンスアート」だと言われている(胡和平, 2010)。北京オリンピックの開会式は、オリンピック本来の平和・友好・公平という人類普遍的価値に、団結や和同のような中国的価値観を付け加えたということができるだろう。

以上のような北京オリンピック開会式の準備には、実に7年もの歳月が費やされ、数えきれない程多くの人々が直接的・間接的に参加した。結果的に、開会式の成功は「拳国体制」に頼るところが大きかった(王寧, 2009)。国家意義に満ちたあらゆる「運動」と同様に、開会式は社会全体を動員し、しかも大衆から高い支持を得た。中国の人々は開会式に参加することで満足し、誇りを感じたのである(同時に犠牲を強いられた人もいるが)。インターネット上で「漢服(漢装)」を中国代表団の制服にしようと強く叫ばれたのも、一般人による積極的な参与の例に数えられるだろう(周星, 2003)。更に、大勢の人々がパフォーマーやボランティアに名乗りを上げた。この文化ナショナリズムの波を支持するように動員された者の中には、もちろん歴史学者や芸術家なども含まれる。開会式は中国文化の精髓を象徴的に再現する必要があり、同時に大型パフォーマンスアートの形式で中国人の創造力と想像力を演出する必要があったためである。張藝謀を代表とする芸術家集団は、伝統的な中国神話とシンボルを再現・演出したり、「個別包装」された中国文化を世界へ発信したりした経験を持っていた(張英進, 2008: 229-231)。例えば張藝謀は著名な中国人映画監督であるだけでなく、海外の観客に「中国」を発信することに最も長けた中国人である。『Impression Lijiang (印象麗江)』・『Impression, Liu Sanjie (印象劉三姐)』・『Impression West Lake (印象西湖)』などの「Impression・印象」シリーズ作品を手がけた



写真4 北京オリンピック開会式：56の民族の子供たちと国旗（新華社より）

彼にとって、今回の開会式は『印象中国』というもう一つの作品でもあっただろう。ある研究者が指摘したように、張藝謀は中国政府と世界——特に西洋——の「オリエンタリズム」の視線が重なる点を見つめ、双方の要求を満足させることができた。ここに彼の成功の鍵がある。西洋が中国を凝視するプロセスを見つめることで、彼の作品は自主的に自己を「民俗化」する。このような「東洋人のオリエンタリズム」は、西洋世界のオリエンタリズム式美的趣味とその標準に迎合するのである（張英進、2008: 126）。言い換えると、オリンピック開会式が中国文化と中国コードに対して行った解釈と活用は、「国際化」という理念の下、海外観客も理解・受容可能な芸術言語で人間味と人情を突出させ、同時に抒情性やロマン、幻想的雰囲気などを創造しなければならなかった。この意味において、張藝謀は「中国がスピルバーグを恋しく思わない」（米国スポーツチャンネル ESPN のコメント）ように尽力したのである¹⁰⁾。

四、開会式に対する「内部」と「外部」の評価

北京オリンピック開会式で実際に登場した中国文化要素が持つアレゴリーや「隠喩」の象徴性は、各国の観客が理解しやすい部分もあれば、分かりにくい部分もあったようだ。後日北京で行われたアンケート調査によると、「四大発明」を理解し、誇りに思う北京市民は非常に多かったが、北京在住の外国人で「四大発明」を知る者は僅か6%だった。もしも国外で同様のアンケートを取れば、数字はもっと低くなるだろう¹¹⁾。言い換えると、

10) アメリカ人映画監督スティーブン・スピルバーグは2008年2月12日、中国がスーダンのダルフル問題にとった態度を理由に、北京オリンピック開会式の芸術監督を降板した。これは後に一部欧米メディアによって大きく取り上げられ、北京オリンピックを巡って生じた事件の一つとなった。

11) 「外国人眼の中の中国：長城、功夫、中餐」『新京報』2008年10月9日。



写真5 中国鉱業大学の学生が北京オリンピック開幕式をテレビで観賞
(中国鉱業大学新聞網より)

「四大発明」に関する儀式コードは国内観衆にとってより解読しやすいものであり、その伝達効果も異文化圏の海外観衆に比べて大きかった。開会式に関して、中国国内と海外の評価には差異があったのである。

中国国内において、国民が開会式を受容し、認可した確率は高かった。開会式当日、中国の大手調査会社 CTR 市場研究機構が全国 15 都市の 1500 世帯をサンプルに行った電話調査によると、テレビ・ラジオ・インターネット・ワンセグなど各種メディアで開会式を視聴していた国民は実に 98.1% に上り、空前の視聴率を記録した。しかもそのうち 90.3% の国民が開会式の文藝パフォーマンスに満足しており、中国文化とオリンピック精神の見事な調和だと考えていた¹²⁾。『新民晩報』と復旦大学メディア・世論調査センターが 8 月 9 日に任意の上海市民を対象に行った電話調査によると、満足な開会式だったと答えた市民は 96% (「非常に満足」48%・「比較的満足」34%・「満足」16%)、そして「視覚効果が優れていた」、「衝撃的だった」と答えた市民はそれぞれ 92%、90% に上った¹³⁾。また異なるアンケート調査では、調査対象となった成都市民の 96% が開会式を視聴し、94% が開会式を賞賛している (張良娟・郭晴、2009)。複数の資料や統計数字が示すように、開会式が提示した文明史の記憶や中国文化コードは国内の大衆に高く認知され、彼らはかつてない

12) 「2008 北京奧運開幕式全媒体受衆接触率」中国中央電視台網 CCTV.com、2008 年 8 月 9 日。

13) 「本日午前中に行った任意調査の結果によると、調査対象者の 96% がオリンピックの開会式に満足している」『新民晩報』2008 年 8 月 9 日。

ほどの誇らしさを感じる事となった。このことは中国国内に住む国民の文化・民族・国家アイデンティティを強めたばかりではない。世界中の華人にとっても、時空を超えて祖国を「想像」し、中華台頭と中国における平和の芽生えを体感する絶好の機会となったのである¹⁴⁾。儀式政治としての開会式が「内側」に及ぼした作用は、まさに国家アイデンティティ構築の促進だった。開会式に何度も登場した中国文化コードは、人格化や象徴化を経て、中国国民に喜んで受け入れられていった。このような国家儀式祭典を通じて、主観的意識・姿・感情としての国家アイデンティティが生成・増幅されうることは、中国においてその有効性が証明されたといつて良いだろう。

国内メディアの北京オリンピック開会式に対する賞賛は圧倒的なものがあり、マイナス評価はほとんど見られなかった¹⁵⁾。そのうち代表的なものとして『南方週末』の評価が挙げられる。『南方週末』はオリンピック開会式を「本年度特別表敬」の対象に並べ、その理由を以下のように述べている。「(開会式は) 中国60年以来ひいては中華民族有史以来、最も雄大な規模で行われた文藝演出だった。決して失敗が許されない全過程において、内部と外部からの挑戦・高度の要求・論争・期待を受け止めた。」「張藝謀と彼のグループは驚異的な意思と想像力を以て、開会式に溢れんばかりの歴史感と民族性を賦与し、全国及び世界最多数の観衆に認められ、国際的な榮譽を勝ち取った。100年に及ぶ中国現代化の記憶を遡ってみても、たった一度きりの機会・一回限りの演出が、これほど巨大で集中した文藝技量を以て、古代中国の絢爛たる姿を世界に示したことはなかった。古代文明と共和国の平和への願いは、雄大に表現された。藝術の作用と境界線は、一つの民族が表現したいと熱望する集団性激情に触れた途端、計り知れない可能性を生み出す。開会式が用いた経典的な民族コードや国際的現代観念及び技術は、まさにこのことを証明した。」¹⁶⁾

だが、北京オリンピック開会式は国内のコンテキストや儀式政治の論理内部でのみ理解されるべきではない。なぜならこれは全人類の祭典でもあり、同時にオリンピック精神を盛り込む必要があったからである。更に開催国である中国も、開会式を通じて「他者」か

14) ベネディクト・アンダーソンの理論によれば、民族国家は共に一つの想像の政治共同体である。そのアイデンティティの構築は政治・歴史・文化・コミュニティなど諸要素の複合的影響を受ける。厳密に言えば、民族国家の「民族」というのは単一のコミュニティではなく、ある種の文化想像の投影あるいは構築された文化想像である。詳細は (Benedict Anderson, 2003) を参照のこと。

15) 数少ないマイナス評価には、次のようなものがある。開会式の「解説」があまりに「正統派」で「文芸口調」；文学的な語りは感動を生み出す一方で、一般的な日常言語とはかけ離れており、観客に呼びかけ、答え、これと共に連動するのは難しい。開幕式終了後このように否定的な意見を述べたのは、国内のネット住民である。恐らくこれは一部の国民が張藝謀の生み出す視覚効果にもはや新鮮さを感じなくなったためだろう、と分析をする者もいる。ただ、張藝謀は西洋人の中国に関するポジティブなイメージに迎合し、国内外のメディアから高く賞賛された。結果的にこの賞賛がインターネット上の批判をかき消すこととなった。

16) 「年度特別致敬：北京奧運會開幕式」『南方週末』2009年1月22日。

ら見た中国のイメージを変えたいと切望していたからである。IOC 会長ロゲ氏は、後日開会式を次のように評価している。「世界の大部分の人々にとって、中国には神秘的なところがある。北京オリンピックは世界各国の人々に、非常に優れた国の姿や中国五千年の伝統文化を見せてくれた。世界は中国に対する見方を変えるだろう。これは他の国々の人たちにとっても、非常に重要なことである。」(金汕、2009: 53) 独創的なアイデアで構成・演出されたオリンピック開会式は、諸外国でも最高視聴率を記録している。世界の注目を集め、普遍的な賞賛を得たと言ってよいだろう。欧米及び日本のメディアも基本的にはプラスの評価をしており、この開会式が中国の新たな国際的イメージを構築したことを認めている¹⁷⁾。開会式は欧米メディアの注意力を、いつもの政治問題からオリンピックそのものと中国の政治以外の方面へと、一瞬にして導いていった。辛辣で鋭かった批判すらも、徐々に客観性と理性を増していった。伊紙『コリエレ・デラ・セラ』の記者が書いたように、「中国は世界の一員として、厳しい責任追及に耐えながら、尚も世界へ向けて歓迎の意を表した：『朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや』¹⁸⁾。米 NBC オリンピックチャンネルの司会者は、「開会式について言えば、今後他の国が同じ賞杯を得ることはない」と述べ、豪紙『シドニー・モーニング・ヘラルド』は「全世界が2008年オリンピック開会式のような巨大規模の創意溢れる祭典を見たことはなかっただろう」と伝えた。米紙『ニューヨークタイムス』、『タイムズ』、そして世界中の視聴者に「現実を生産する」(Jonathan Friedman, 2004: 303) 米 CNN テレビなども、以下のようなコメントを寄せている。今回の開会式は、今まさに強まりつつある中国経済・政治の実力と大国としての中国の「再出現」を表現しており、本当の意味で民族の誇りを反映するものだった；欧米基準から見ればまだ裕福とは言えないにしろ、中国は人類史上「最も短期間で最も大勢の人間の生活水準を向上」した；開会式は「この共産党国家の国際イメージを一新」することになった。また英国 BBC の開幕式実況中継においても、司会者は開会式が中国人の自信と戦略的思考を示していると評している。そして米国発行の『世界日報』は8月8日の社説において、北京オリンピックは中国のソフトパワーを集中的に表現する機会だったとしている。一方、2008年8月7日から11日にかけて、AP 通信と米調査会社 Ipsos が共同で実施した民意調査によれば、55%の米国人がオリンピック主催権を北京に与えたのは良い決断だったと答えたが、この数字には開会式の成功が影響していると考えられる(李慎明、2009: 84-85)。米ニールセン・メディア・リサーチ(NMR) が開会式と閉会式の後に16の国と地区の消費者を対象に実施したオンライン調査によると、調査対象者のうち70%が

17) 国際社会の北京オリンピックへの注目は、北京を訪れた総勢32,278名にも及ぶ記者の数にも表れている(うち登録記者26,298名、非登録記者5,980名)。

18) 「路透社：世界媒体盛賛北京完美之夜」中国評論新聞、<http://www.chinareviewnews.com>、2008年8月9日。

北京は想像以上に「現代的で高い科学技術を備えている」と答え、43%が北京は予想よりも清潔だと答えた。同時に、北京の環境は想像以上に良いと回答した海外観客・視聴者は56%に上った。これらはオリンピックが中国にもたらした「イメージ収益」¹⁹⁾だった。

以上のような海外メディアの賛辞を、中国国内メディアは多数引用し続けた (Timothy J. McDonald, 2008 ; Steve Chapman, 2008)。だが国内の偏った世論とは異なり、欧米及び日本の主流メディアのオリンピック開会式に対する評価は、もっと複雑で多様性に富んだものだった。例えば、独紙『デイ・ヴェルト』には「完璧なパフォーマンスは中国の認められようとする狂的なまでの渴望を示しており、しかも多数の宣伝要素を含んでいた」とある。英紙『インデペンデント』は開会式を「視覚的にも壮観」と称賛しながらも、「パフォーマンスは時に理解し難かった、特に書道の精妙さを解せない外国人にとっては」としている。また米紙『ロサンゼルス・タイムズ』は「雄渾ではあったが、大半の文化叙説が言葉なく、単調」と指摘する。中国色に富んだパフォーマンスアート（「団体体操」）でもある大型集団演技に関しては、一糸乱れぬ歩調が確かに衝撃的な視覚効果を生み出しはしたが、欧米人にある種の軍事性を感じさせやすいものだった。例えば『USA トゥデイ』は、「ほとぎ」の場面を「史上最も歓迎の意を欠いた『歓迎』」と評している。更に一部の欧米及び日本のメディアは、規模の巨大さを追求した開会式に違和感を覚え、その成功に不快感を示している。それは単に彼らが自らの立場と文化感覚に基づいて異文化を誤解し、不可解と感じたためだけではない。同時に一種の偏見に基づいた拒絶と排斥に固執したためでもあっただろう。例えば北京オリンピック開催期間中、何ら事件が生じなかったことに関して、これは「極度の権威主義」が功を奏したためで、北京オリンピック「最大の欠落は抗議の不在」であると評し、終始平穩に執り行われたオリンピックへの失望感を露わにしている (孫有中, 2009: 285-292)。一部海外メディアはほとんどお決まりの「伝達の枠組み」に基づいて、中国が上から下への「警察式」スタイルでオリンピックを組織・運営したと見ていた (馬惠玲, 2010: 67)。また開会式に対するマイナス評価は、プログラム細部のあら探しにまで発展していった。それは花火で描いた巨人の足跡は一部を除いて全てコンピューターグラフィックスによる合成映像だったとか、『歌唱祖国』の歌声は実は別の少女による吹き替えだったという類のものである。

中国の国家イメージを象徴的に構築する工程が開会式だったと理解するならば、その「外部」に対する効果は「一戦伐って万事解決」²⁰⁾というわけには行かない。英紙『ガーディアン』は開会式の矛盾を次のように指摘する。世界で最も汚染された都市である北京

19) 「調査結果によれば、海外観衆は北京オリンピックが想像以上に良かったと考えている」。中青網、<http://www.youth.cn>, 2008年9月3日より引用。

20) 原文は「畢其功於一役」『民報』創刊の辞（孫文）に見られる。——訳者注。

で、子供たちが「木を植えましょう、種をまきましよう、大地が緑に変わった」と歌っている、と。一方米国メディアのなかには、開会式を放送したNBCが経済利益のために敏感な話題を避けた、とその「責任感の欠乏」を批判するものもあった。

五、中国のイメージに関する攻防は長期化する

一年の時が流れ、張藝謀を含む開会式の主要製作者たちが初めて顔を揃えることとなった。その席で彼らは開会式が「非常に難しい国家文化とイメージのマーケティング」だったと証言した²¹⁾。まさにイメージの構築こそがオリンピックと開会式を巡る全ての争いを理解する鍵だということが分かる。開会式を通じて、中国は知的で、平和を好み、開放的で、尚且つ強いソフトパワーを備えた国、という印象を世界に誇示しようとした。中国からすれば、かつて非難を浴びた林妙可の「口パク」問題なども、ただ最も優れた歌声と最も優れた容姿を選択しただけのことだったと言えるだろう²²⁾。

かつては飽きもせず中国に汚名を着せ、北京オリンピックに難癖つけようと躍りになっていた欧米メディアだったが、開会式が成功を取めた途端、ある種の「だんまり」現象が生じることになった²³⁾。だが、中国のイメージを巡る攻防は長期化するだろう。オリンピック「非常」時の世界的お祭り騒ぎが過ぎてしまえば、イデオロギーの対立に基づいた「日常」と中国を邪悪化しようとする亡霊が再び立ち返ってくる。これはフランスのラファラン元首相が2011年2月28日付けの仏紙『フィガロ』で述べたとおりである：2008年と2010年に北京・上海両市で煌めきを放った後、欧米の賞賛は次第に消え去り、次にやって来たのは不安と恐怖だった²⁴⁾。

2008年の北京オリンピック開会式は、中国史上最大の「イメージプロジェクト」だった。中国国内のディスコース体系において、「イメージプロジェクト」という言葉には否定的な意味合いが強い。だがその対象が海外（海外宣伝）や国際社会である場合、中国の論理に基づくイメージ構築プロジェクトには一定の意義があり、展開できる機会もそう多くはない。長期に渡って中国は国際世論から汚名を着せられ、その状況からなかなか抜け出せないでいた。もちろん中国自身にも現実的な問題があるが、「脅威論」や「崩壊論」のような冷戦の爪痕を残した悪意ある中傷を避けることができなかった。オリンピック開

21) 「北京奧運會開幕式副總導演陳維亜：一次艱難的文化營銷」『中国經營報』2008年8月8日。

22) 中国新聞網（www.chinanews.com）が8月12日に報道したところによると、開会式音楽総合プロデューサー陳其鋼はその単独インタビューの中で、楊沛宜の落選が対外イメージを考慮したためだったと語った。

23) 「北京奧運會開幕式令西方媒体頓時噤声」星島環球網（www.stnn.cc）、2008年8月15日。

24) 「恐懼是对中国崛起的錯誤回應」『參考消息』2011年3月3日。

会式が世界の注目を集めることが明らかな以上、この千載一遇の機会に全国の力を最大限に注ぎ、巨大な国家イメージプロジェクトを運営することは、中国にとって理にかなったことだった。中国の特殊な事情・歴史伝統・文化論理などを理解する者にとって、なぜ開会式があれ程の規模で行われたかを理解するのは難しくない。中国文化は「イメージ（面子）」を重んじる特徴があり、中国人の尊厳とイメージに抵触すればたちまち強烈な反応を引き起こす。中国のイメージに関する話題を論じるならば、まずは中国と外部世界が相互に連動する背景と具体的コンテキストの下で、中国のセルフイメージつまり自ら構築したイメージを真剣に見つけ出さねばならない。海外の大衆と世論の属する社会がいかにして、どのような中国イメージを「生産」し、「消費」するのかを論じるのはその後のことある。

近代以降の苦難の歴史と屈辱の経験から、中国政府と国民はかつて外部世界に対して強い不信感を抱いていた。また長きに渡って、外部世界のメディアとのコミュニケーションも不得意としていた。中国政府筋は、国家イメージに抵触し且つ重要な影響を及ぼす問題は、海外ではなく国内の人々やメディアに重要視されると考えていた。中国自らが望み、提示するイメージ——例えば中国式官僚口調、「政治的公正・political correctness」、拳国体制など——を、欧米人がそのまま全て受け入れるはずはない。同様に、欧米式の傲慢な教訓的口調、「政治的公正」、高みから見下すような態度も、また中国に反感を抱かせた。結局のところ、「イメージ」を巡る相互作用は決して単方向に生じるのではない。欧米が過度に中国を邪悪化すれば、中国における彼らのイメージも損なわれる。特定の背景と条件の下では、相互的マイナスイメージが継続的に刺激された結果、増幅・拡大の一途を辿るかもしれない（岡部達味・厳安生・劉傑・川島真・砂山幸雄、2005: 3-36）。先進国のメディアと国民が中国の急速な発展と平和的「台頭」に対して違和感を覚える状況は普遍的に存在しており、彼らは中国から発せられる新たなプラス情報に順応しがたい。このような現状を考えれば、中国は過去から学習し、慣例的に国内政治の宣伝方法を海外へ適用して反感を招くことを避けねばならない。中国にとって最も困難なのは、良い国家イメージを維持するため努力しなければならないにもかかわらず、炭鉱事故・汚職・民族紛争・その他社会問題の発生を食い止めることが難しいことである。海外の一部反中メディアや嫌中派の人々にとって、「毒餃子」のような事件を探し出して煽ることは、最も少ない元本で最も高い効果を得られるのである。なぜなら人間の他者に対する想像は常に主観的で、特定時期における人々の願望を映し出すものだからである。例えどんな些細な事件であっても、異民族に対するイメージを形成し、影響を及ぼす可能性を孕んでいる（Gerhard Maletzke, 2001: 109-110）。

欧米及び日本の中国に関する知識には、ロマンティックな誤解も含めた中国観と中国学、否定的な認証・解説・誇張などがあるが、これらは全て社会意識の構成要素である。

時には国家の意思（例えば外交上どのように中国との関係を処理するか）に対して、直接的・間接的に影響を及ぼすことすらある。もちろん欧米の中国に関するイメージは流動的で、決して不動の一枚岩ではない。だが、長期的に安定した形で存在していることは確かである。中国に関する学術用語・公式用語・メディア言語・大衆情緒などは、共に中国の具体的なイメージを創り上げており、これはある種の「共謀」と言えるだろう（呉光輝、2010: 175-179）。こうして生産された中国のイメージは、他国あるいは欧米世界の内部で消費され、大衆の優越感や自己中心的情緒、そして所謂「正義感」を満足させる。と同時に彼ら自身の文化アイデンティティの隠喩的表現となり、その世界観を形成・構築する際に必要とされる。その中には、中国が国際社会において大国・強国へと成長してゆくことに対する、またそのような中国台頭への対処方法に関する、彼らの焦り・不安・期待などが含まれている。結局のところ、これは欧米の異世界に対する一種の幻像に過ぎない（周寧、2006: 404-407）。こうした幻像は欧米社会の文化コンテキストにおいて生成・伝達され、言語的権力をもって関連する全ての話題をコントロールすることになる。そして欧米で構築された中国イメージは中国へも伝達され、中国内部においても自己のオリエンタリズム化現象を招く。または一種の圧力と化して、欧米が期待するイメージへ変貌するように中国に迫り、これを導く。

欧米の中国観と中国イメージに関して、議論すべきなのはそれが中国の現状を反映したものであるかどうか、誤解をふくんでいないか、真実かどうか、ということではない。本当に重要なのは、平和と繁栄の道を選択した以上、中国が十分な資源・方法と忍耐力・勇気を手に入れ、ソフトパワーの形で自らの国際地位向上と国家イメージの形成に努力し続けることだろう。国家イメージというのは一つの国家が他国の大衆に託す総合評価或いはイメージのことであり、自らの手による構築と他者による保有という二つの部分から成り立っている。中国が国家イメージを気にするならば、他者との、国際社会の大衆との対話を引き続き展開すべきである。その対話のコンテキスト自体は、常に権力・利益・実力の影響を受け、また欧米が設定する様々な議題に導かれることだろう。だがそれでも中国は理想とするセルフイメージを構築する試みを続けなければならない。実際のところ、国家イメージを巡る衝突は現代国際社会の協調と対話の一種のシステムである。中国という国が自信をもってソフトパワーを示すためには、文化をその自信の基礎とし、各方面の成長をその誇りの根拠とする必要がある。2008年の北京オリンピック開会式では、中国が自主的に世界と交流し、平和的に国際社会へ溶け込んで全人類に貢献しようという姿勢と願いを表現した。これに続く形で、2009年の国家祭典と閱兵式では「台頭」という点を強調し、世界上の武力を含むいかなる力もこれを阻止することはできないことを示している。

おわりに

基本的にオリンピックは欧米に主導されており、ある意味欧米がルールをコントロール・制定する世界システムの縮図だと言える（馬恵玲、2010: 33-34）。そこから長い間遊離していた中国は、分裂・対抗の姿勢を崩さず、独自に活動の場を設けようとしたことさえあった（例えば1962年にインドネシアと共同提起した「新興勢力競技大会」）。だが現在の中国は、自主的かつ積極的にオリンピック体制に参加しており、傍観者・革命者から体制参与者へと大きく立場を転換させている。欧米によって設定された多くの国際的議題と同様に、オリンピックに関わるディスコース体系において、中国は関連規則やルールを学び、適応していかなければならない。そうして初めて中国自らが語り、世界に耳を傾けてもらう機会がやってくるだろう。

2008年北京オリンピックの招致・開催期間中、中国はこのグローバル体制に加入するために複数の公約と改変を行った。例えば海外メディアに「新聞自由条約」と揶揄された『北京オリンピック及び準備期間中の外国人記者の中国取材に関する規定』の公布；環境改善と「グリーン・オリンピック」開催に関する公約；全面的に「オリンピック礼儀」を取り入れ、国内で巻き起こした「市民の公共行為の文明的素養」を高めるための「運動」など。このように非欧米国家が欧米主導のオリンピックシステムに参加しようとする際、何らかの変化を求められる例としては、1988年の韓国ソウルオリンピックが挙げられる。当時、良い国家イメージを作るために、韓国社会は16日間犬肉を食べることを止め、「国民スマイル運動」を推進し、また時間概念の徹底を図るために多方面から努力した。本論文で分析した北京オリンピックは、これを更に上回る状況だったと言えるだろう。オリンピック開会式において、中国は「礼儀之邦」としての古代文明を余すことなく示した。だが、北京オリンピックの初期準備段階では、「礼儀作法に無頓着な」北京市民に対して、「迎奧運、講文明、樹新風（礼儀正しく行動し、新しい品格を身につけてオリンピックを迎えよう）」といった類のモラル向上運動を何度も繰り広げなければならなかった。例えば「順序を守って列に並ぼう・整列推進デー」、「席を譲ろう・親切デー」、「グリーンツェーリング」、「国民健康促進」、「オリンピック文化祭」、「スマイル北京」などがそれに含まれる。公共衛生・公共秩序・公共交通・公共観賞・公共参加などに関する「文明的状況」を全面的に向上すべく、「講師団」による講義といった方法までとられた。つまり生活上・社会上・職業上・国際交流上の礼儀作法や大学キャンパス・競技場における礼儀作法（「京罵・北京方言による罵りやブーイング」の廃止）をテーマにして、市民の養成を図ったのである（馬恵玲、2010: 122-125）。以上のような一連の活動には、国民一人一人を国家イメージの担い手にしようという明らかな意図が働いていた。

国家イメージは形なき緩やかな圧力となり、北京オリンピックの前後10年以上もの間、

中国が歩む方向に影響を及ぼし続けた。しかし中国が一旦参与を決めてしまうと、その巨大な体とエネルギーによって、オリンピックというグローバルシステムには必然的に多くの変化をもたらされることとなった。大規模な社会動員・「力を集中して大事を行う」社会主義制度の優越性・開会式が全力で作上げた「文化中国」という大国イメージ（馬惠玲、2010: 214-215）……いずれにしろ、中国がオリンピックのようなグローバル体制に参与した事実とその結果もたらされた変化を目にして、欧米の有識者は次のように気付いた。中国と権利を享受する新しい世界に、欧米は適応しなければならない、と（Tony Blair、2008）。もしも4年に一度のオリンピックの熱狂をグローバルなポトラッチ（potlatch）式饗宴あるいは榮譽合戦に例えるならば、2008年にオリンピックを「主催」した北京は、中国式の饗宴をもって大きくその「誇示」のレベルを引き上げ、次からの開催国に一定の負担を強いる結果を招いたといえることができるだろう。

21世紀を振り返ってみると、中国が参与した国際競争は人材・資材・経済そしてソフトパワーを含む総合的国力の競争だった。その際、中国の国家イメージに関する議論と攻防は途切れることなく続いていた。今後も中国はセルフイメージの更新と向上に力を注ぐだろう。欧米社会はそれを排除する一方で、中国の存在感の拡大にも徐々に適応し始め、新しい中国イメージを構築し続けるだろう。中国のイメージを巡る攻防戦の背後には、中国社会の実質的・全面的な成長がある。このプロセスは非常に長く、複雑なものとなるだろう。例えるなら、これは中国人観光客が世界を旅する際、中国政府から様々な「注意事項」を提示され、世界の多くの観光名所では中国人観光客を対象にした善意的な・差別的な警告を示され、その結果出国する国民自身が自ら担っている中国のイメージを次第に意識し出すようなものである。またこの他にも、「メイド・イン・チャイナ」製品の海外輸出に伴ってブランドイメージを向上しようと努力し続ける国家行為²⁵⁾もあれば、品質・環境・その他可能な全ての理由を以て中国製品を避け、クレームをつけ、更には潰そうとする欧米諸国の衝動もある。現在メイド・イン・チャイナの製品は世界のあらゆる国で目にすることができるが、これは世界上の各貿易主体が協力して作業を分担し、利益を享受することで成り立っている。欧米及び日本に存在するメイド・イン・チャイナに対する蔑視と「中国潰し」は、こうした事実を無視していることが多い。とはいえ、中国政府と企業が広告を通じて製品イメージと中国ブランドを向上するよりも、品質管理の面により多くの力を注ぐべきなのは、明らかである。

2011年初頭、胡錦涛国家主席はアメリカを国事訪問し、オバマ大統領から最大級のもてなしを受けた。これは儀式政治を重んじる中国にとって非常に満足のものであり、国際メディアによっても中国の国際地位上昇を象徴するものだと分析された。同時に中国

25) 「商務部全球投放廣告提昇中国製造形象」『華西都市報』2009年11月30日。

は巨額の資金を投じて、アメリカニューヨークのタイムズ・スクエアで『国家イメージフィルム』を放映しようと努力した。これは中国の国際地位が上昇しただけではなく、その国家イメージ問題における成長、更には社会の各方面の「細部」における成長を反映している。四川省汶川・玉樹の震災被害に対する人道主義的救援、内戦が続くリビアからの中国人輸送など、これらは全て具体的な「細部」における行動であり、他のいかなるイメージプロジェクトよりも効力を発揮した。大規模な工程を得意とし、作業の細やかさに欠ける中国にとって、このような細部における向上は——国民の生活や民主主義に関わるものは特に——直接国家イメージに働きかけることになる（周兼明、2011）。平和的台頭という前提の下では、ソフトパワーの直接的表象が即ち国家イメージである。この国家イメージは文化ナショナリズムだけでなく、社会の絶え間ない啓蒙と進歩によって支えられなければならない。ちなみに、欧米の常識においてナショナリズムは自由主義に対する反動として理解されることが多い（銭雪梅、2003）。だが長きに渡り虐げられ、問責の難を受けていた「弱者」にとって、ナショナリズム特に文化ナショナリズムは保守主義の同義語であるとは限らない。偏見と優越感の激昂に基づいてその方向性を見出してしまうのではない限り、文化ナショナリズムが理性と開放に抵触することはないのである。とはいえ、今後は文化ナショナリズムを国家イメージ形成の資源として努力するよりも、どんなに小さいことであっても国民の生活や民主主義を向上させることの方が更に大切になってくる。

もしも中国の国家イメージを巡る攻防と相互作用的な対話が、関連する「国境なき想像」をもたらすならば、それは中国を成熟した国へと導く一種のシステムとなり、喜ばしいことこの上ないと言えよう。中国のイメージに関する国境を越えた異文化間相互作用が、国際社会のポジティブな交流実践として、中国のイメージ改善・中国社会の成長・欧米の偏見解消・国際社会の民主化など多方面において良い影響を及ぼすことを、願わずにはいられない。

（邦訳：西村真志葉）

参考文献

- 郭於華、2000「民間社会與儀式国家」郭於華編『儀式與社会変遷』社会科学文献出版社。
彭兆栄、2003「人類学儀式理論的知識譜系」『民俗研究』2003年第2期。
クリスティアン・布隆貝格（Christian Bromberger）2008「作為世界觀和儀式的足球比賽」（何少波訳）、王宵冰編『儀式與信仰——当代文化人類学新視野』民族出版社。
曾慶香、2008「做像與奇觀—北京奧運開幕式的符号分析—」『現代伝播』2008年第5期。
孫有中、2009『解碼中国形象—「紐約時報」和「泰晤士報」中国報道比較（1993～2002）—』世界知識出版社。
周寧、2006『天朝遙遠—西方的中国形象研究—』北京大学出版社。
李慎明編、2009『中国民衆的國際觀（第一集）』社会科学文献出版社。
金汕、2009『当代北京奧運史話』当代中国出版社。

- 潘子剛、2009a 「日本長野護火運動の社会学分析」『愛知論叢』第86号。
- 潘子剛、2009b 「偏見の構造—『毒餃子事件』引發『嫌中』情緒の社会学分析—」『愛知論叢』第87号。
- J. A. 曼根 (J. A. Mangan)、2008 『奧林匹克文化概論』(董進霞訳)、北京大学出版社。
- 胡曉明、2011 『国家形象』人民出版社。
- 維克多·特納 (Victor Turner)、2007 『戲劇、情景及隱喻：人類社会的象徵性行為』(劉珩·石毅訳)、民族出版社。
- 馮惠玲ほか、2010 『北京奧運的人文價值』中国人民大学出版社。
- 毛冷蕊、2009 「象徵、互動與媒体介入—北京奧運會開幕式的文化人類学解析—」『湖北師範学院學報』(哲学社会科学版)、2009年第3号。
- 王天祥·李琦、2009 「文本的生成與闡釋：北京奧運會開幕式解析」『電影評介』2009年第2号。
- 喬納森·里德曼 (Jonathan Friedman)、2004 『文化認同與全球化過程』(郭建如訳)、商務印書館、2004年。
- 邱華樺、2010 『印象北京』廣西師範大學出版社。
- 胡和平、2010 「盛世華章—論2008年北京奧運會開幕式文藝表演—」『湖南工業大學學報』(社会科学版)第15卷第1期。
- 王寧、2009 「北京奧運會開幕式的回顧與啓示」『首都体育学院學報』第21卷第1期。
- 周星、2003 「新唐裝、漢服與漢服運動—二十一世紀初葉中國有關『民族服裝』的新動態—」『開放時代』2003年第3号。
- 張英進、2008 『影像中國：當代中國電影的批評重構及跨國想像』(胡靜訳)、上海三聯書店。
- 張良娟·郭晴、2009 「從國家認同看北京奧運開幕式傳播效果—以成都地區居民調查為例—」人民網—伝媒頻道、2009年12月16日。
- 本尼迪克特·安德森 (Benedict Anderson)、2003 『想像的共同体—民族主義的起源與散布—』(吳叡人訳)、上海世紀出版集團。
- 蒂莫西·J·麥克那爾帝 (Timothy J. McDonald)、2008 「從過去走向未來」(陳一訳)『環球時報』(轉載)、2008年8月9日。
- 史蒂夫·查普曼 (Steve Chapman)、2008 「看清楚現代化的中國」(丁雨晴訳)『環球時報』(轉載)、2008年8月11日。
- 岡部達味·嚴安生·劉傑·川島真·砂山幸雄、2005 「座談：相互イメージのなかの中日關係」『中国21』第22号。
- 馬勒茨克 (Gerhard Maletzke)、2001 『跨文化交流—不同文化的人與人間的交往—』(潘亞玲訳)、北京大学出版社。
- 吳光輝、2010 『日本的中國形象』人民出版社。
- 托尼·布萊爾 (Tony Blair)、2008 「我們可以幫助中國擁抱未來」『華爾街日報』2008年8月26日(『參考消息』2008年8月29日から転用)。
- 周兼明、2011 「国家形象就写在百姓臉上」『鳳凰週刊』2011年第6期。
- 錢雪梅、2003 「文化民族主義的理論定位初探」『世界民族』2003年第1期。